日本・京都とユーロ＝アジアにみる「装飾」芸術の世界

「京都」「日本」のアート・エンタテイメントを飾る美術のコア、「装飾」

鶴岡真弓、磯部直希、望月規史

●京都・日本の工芸の「装飾性」

日本の美的創造の歴史において、京都を中心とした聖俗両分野にわたる工芸・デザインは、その細密な「装飾性 Decorativeness」によって世界に知られてきた。京都をはじめとする日本の工芸美術は、その繊細・華麗な「装飾性」によって世界に知られ、その「装飾性」は、「装飾文様」によって構造化され、様々な表現が生み出されて、日本の宗教美術・鑑賞美術・生活美術のなかで「装飾文様」の体系に与しないものは存在しない。今日「京都」に代表される「日本」の美的創造を、グローバルな「世界美術」においてみようとするとき、「京都」「日本」の工芸からエンタテイメントまでに「要請」されてきた美的要素として、「装飾性」が不可欠であることが再確認される。

この視点から、本プロジェクト「京都・日本とユーロ＝アジアにみる＜装飾＞芸術の世界」では、宗教美術・鑑賞芸術・生活芸術を貫いて、京都・日本の美術を決定付けてきた「工芸」「美術」を、「装飾」という芸術表象の観点から調査研究するという新しい方法論を掲げ、しかもそれを「京都・日本」に閉じるのではなく、西は「ケルト美術」、東は「日本美術」までにわたる「ユーロ＝アジア」という歴史的な芸術交流を蓄積した「世界性」の層を再発見していくという従来ない目的と方法を構築することを打ち出している。京都・日本の芸術における、こうした「装飾」の歴史的重要性に着目し、これまで本学のアートリサーチセンターのプロジェクトが対象としてきた「時間芸術」の体系化と分析を生かしながら、とりわけ祭礼や荘厳の美術と生活美術に現れる、織物・金工・漆工などの工芸の装飾を、国内と国外から双方向の調査研究によっておこなっている。

本プロジェクトでは「装飾」美術や「装飾」的表象が、活動する場としての、祭礼などの宗教空間及び生活空間・都市空間などで、如何に歴史的に活用されてきたかを、日本と諸文化との関係論のなかで考察し、たんなる伝播論ではなく受容と再構築がまた新たな様式の発信となる「装飾美術の世界史システム」というべき展開において、「京都」「日本」の芸術文化を上記の「世界性」の視点から研究していることが最大の特徴である。これまで当初の計画通りつぎの３つのカテゴリーで調査研究が進み一定の成果をあげた。まず「京都・滋賀・丹波の祭礼における曳山の装飾」の調査研究のカテゴリー、つぎにそれら日本の装飾とユーロ＝アジアの装飾の比較研究のカテゴリー、さらに実際の工芸家・工芸研究者で「装飾」に関連する成果を積み上げている方々との研究会で調査研究を進めるカテゴリーである。そして上記の調査研究で得た装飾美術資料の画像・テキストとプロジェクトの準備段階ですでにおこなわれてきた現地調査での画像資料を含め、これらを一部デジタル化する作業が進められている。

●工芸 と装飾

工芸・デザインにおける「装飾性」の問題は、二〇世紀の美的創造において大きな論争を巻き起こす問題であり続け、二〇世紀の工芸・デザインは、生活と産業における合理性・効率性の標語のもとに、「装飾の否定」から出発した。しかし60年代には「装飾」への再考(アールヌーヴォー様式への再評価)があらわれ、ヴェントゥーリの「レス・イズ・ボア Less is bore」の言説に代表され、1960 年代末以降のポスト・モダニズムのムーヴィメントに至って、「装飾の復活」が推進されてきた。ポスト・モダニズムの思考や表現は「引用の織物」と呼ばれるのだが、まさに「装飾」の意匠や文様は、二一世紀の工芸・デザインに「引用」され多彩な表現を生み出している。

幕末から明治初期に欧米列強の東洋進出と支配を契機として、日本の工芸が、欧米人の「装飾」への「憧憬＝欲望＝商品化」として取引されるとき、「日本」はそこに要請された「装飾性」に応答し、とりわけ明治期の「輸出工芸」は派手な彩色や文様で飾り立てられ、日本＝装飾美という欧米の概念を補強した。しかし欧米からオリエントに向けられた「装飾性への期待」は、「日本」のみにむけられたのではなくアフリカ、ラテン・アメリカ、中央アジア・インド・中国・韓国など非ヨーロッパ諸地域に共通するもので、「京都」「日本」は、まずユーロ＝アジアとの「関係性のなかに」その工芸・デザインのステイタスを保持し創造していることを検証する必要がある。

●公開研究会から海外でのシンポジウムまで――二条城の模写復元、ウズベキスタン民族衣装など

本プロジェクトでは、30 年目を迎えた川面美術研究所による模写復元の成果として内外に知られる二条城・二の丸御殿・狩野派の障屏画(2003 年 4 月、公開研究会。川面家は祇園「都をどり」の背景画制作を明治時代から今日まで担っている)や、京都の錦織(2002 年、錦織の伝統を担う龍村光峯氏を招いたＡＲＣ講演会)は、その金や絹の光沢や多彩による圧倒的な「装飾性」によって世界から注目されている。2003 年 8 月、ポーランド、クラクフ市、日本技術美術センターにおけるシンポジウムでは、鶴岡パネリストとして参加し、この龍村氏の作品をはじめとする日本の錦織とヨーロッパの装飾のテーマのもと、日本・京都の染織を紹介し、ポーランド、イタリア、ドイツ、英国などの研究者との討議から成果を得た。

●内外の装飾美術の調査

さて本プロジェクトでは、このユーロ＝アジアの交流的・共有的様式の分析の対象として、「祭礼の装飾」と「生活の装飾」の両面から調査・研究を進めてきた。今回の発表では、①京都を代表するアート・エンタテイメイントのコアである祇園祭の曳山の懸装品の調査以外には、まだ総合的調査がなされていない亀岡・滋賀の祭礼における「曳山の装飾」の調査の成果を中心に報告する。②また中央アジア・ウズベキスタンの「民族衣装」と「宗教建築」の調査・研究を進めている。以下はその概要である。

1　京都とその周辺の「曳山装飾」

京都最大の祭礼「祇園祭」の山鉾を飾る「織物」をはじめとして、京都・滋賀・丹波の祭礼や宗教美術に工芸美術として表現されてきた「装飾的工芸」の体系的な調査研究が進んだ。京滋地域の曳山の装飾、とりわけ未調査の曳山を軸にいわゆる懸装品の現状を調査し、データを収集整理、昨年度から今年度にかけて現地調査を実施。すでにおこなった調査の対象の祭礼は、京都(亀岡祭鍬山神社祭礼／京都祇園祭八坂神社祭礼)滋賀(近江高島大溝祭日吉神社祭礼／浅小井祇園祭津島神社祭礼／長浜曳山祭

八幡宮祭礼／水口曳山祭水口神社祭礼／日野祭馬見岡綿向神社祭礼／丹生茶わん祭丹生神社祭礼／米原曳山祭湯谷神社祭礼）。これらの曳山装飾の調査から、曳山は織物・漆芸・陶芸・木工などの「総合的工芸」であることが解明されてきている。そしてそれらの工芸は鎖国の間も海外から招来されたものであり、ユーロ＝アジアの装飾美術交流の要として、これらの地域の曳山装飾が、祇園祭のそれと同様にあることが、わかってきた。　２００３年度２月に北海道・青森において実施した「蝦夷錦」を中心とする調査がおこなわれた（小樽市博物館／北海道開拓記念館／弥永北海道博物館／アイヌ民族博物館／北方歴史資料館／函館市北方民族資料館／青森県立郷土館／八戸市博物館　等）。これは「装飾美術の世界性」という観点から、曳山の装飾の最も華麗な分野である「幕」にしばしば使用される「蝦夷錦」の諸問題を探究すべく行われ、「蝦夷錦」と通称される龍や鳳凰、その他の吉祥文様などを織り出した幕の類は、主に江戸中後期以降、アイヌの人々を仲介して明末または清朝期の織物が松前に流入し、北前船によって京都・滋賀にまでもたらされたものであることが再確認された。

地図１

茶碗祭
長浜祭
大溝祭
米原祭
浅小井祇園祭
亀岡祭
日野祭
祇園祭
大津祭
水口祭
京滋地域における曳山祭礼分布図
協力：立命館大学地理学教室

表１

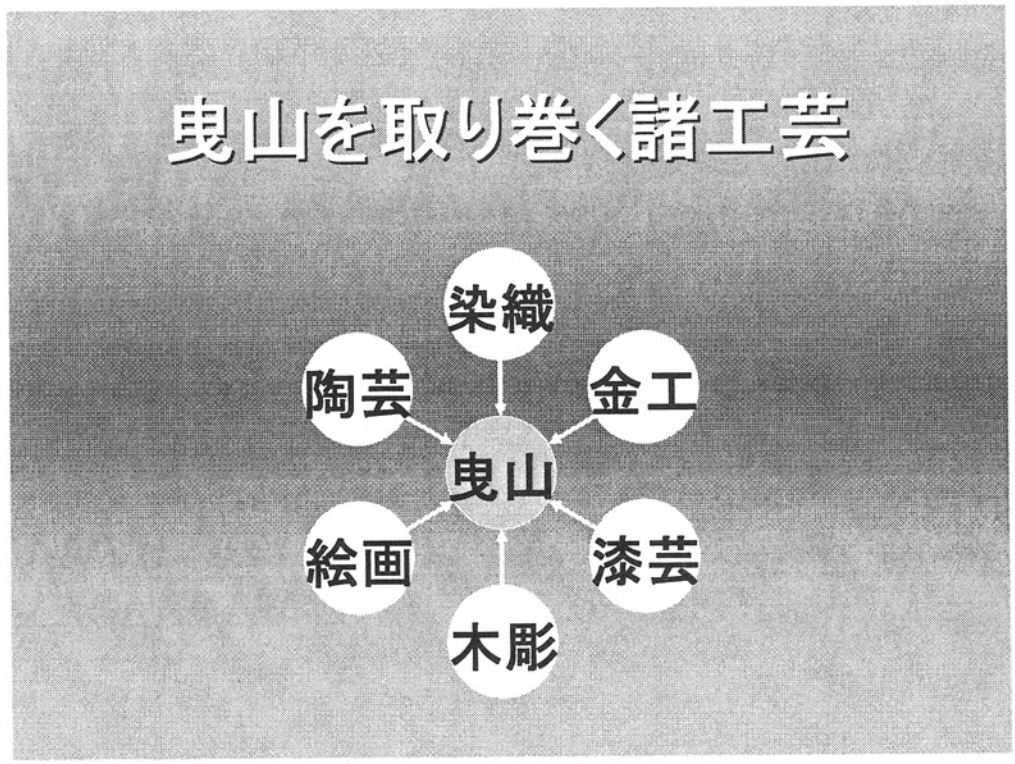
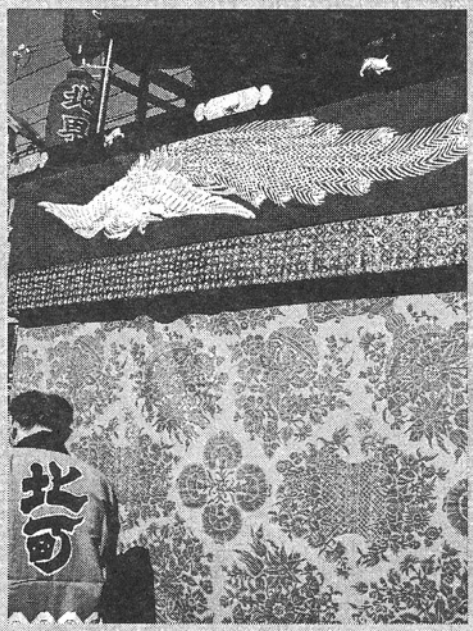
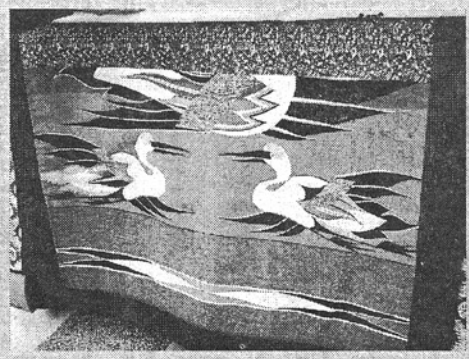

曳山を取り巻く諸工芸
染織
陶芸
金工
曳山
絵画
漆芸
木彫

図1



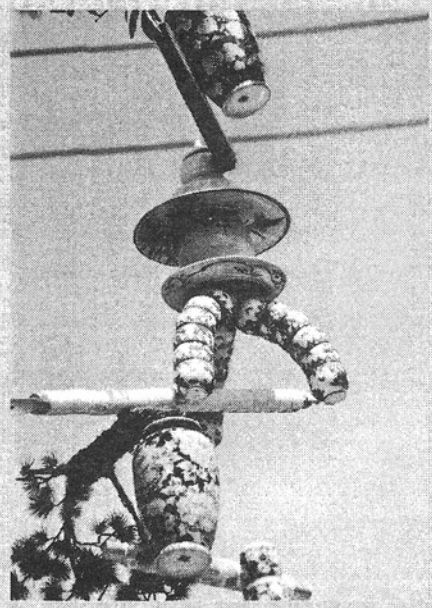
染織Ⅰ（亀岡祭：鍬山）



染織Ⅱ（亀岡祭：蛭子山）

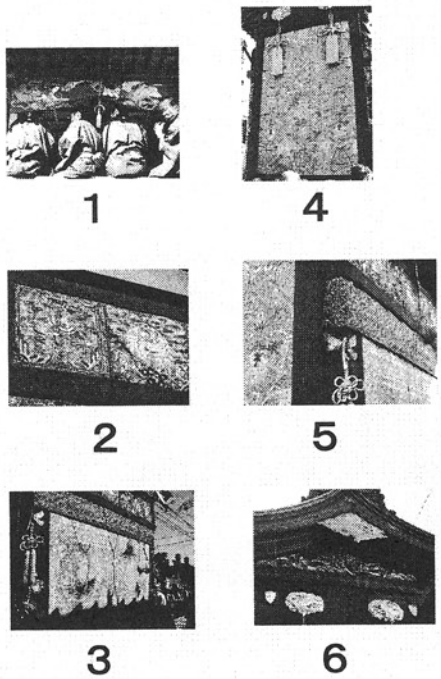
図2

絵画（祇園祭）



陶芸（茶わん祭）

表2



亀岡祭三輪山鉾懸装品
(データベース一部抜粋)

<幕>
1. 右天水引(天人奏楽図):年代不詳
2. 左下水引(胸背継ぎ・官服用刺繍補子)
   天明元(1781)年
3. 左胴懸(英国製羊毛地獅子花卉文様
   捺染:天明元(1781)年
4. 見送幕(印度製クルス唐草文様刺繍)
   天明元(1781)年

<錺金物>
5. 左後方上部隅金物:年代不詳
6. 後方破風・見送幕錺金具
   天明元(1781)年

2　中央アジアのテキスタイル調査研究

ユーロ=アジアの工芸・装飾美術の文明交流史の調査として、ヨーロッパとアジアの結び目であるシルクロードの歴史的拠点ウズベキスタン共和国のサマルカンド、ブハラ、ヌクス、タシケントの主要博物館において装飾美術、工芸美術の所蔵品の様式調査をおこなった。すなわちシルクロードのテキスタイルをはじめとする工芸美術の調査、タジキスタンのオアシス遺跡と博物館上記イスラーム寺院・墓廟・神学校などの建造物に装飾されるタイルの装飾文様の調査をおこなった結果、ウズベキスタンに伝えられるゾロアスター教の時代、イスラーム時代、近現代までの、民族衣装と諸工芸を飾った「文様」が、中央アジアの民族衣装、工芸のなかに、イラン、トルコ、インド、モンゴルをつなぐ、植物文様があることが確認された。イスラーム教、仏教、その他のアジアの宗教の文化的差異を超えて、これらの文様が使用されたことが多数の実作例から確認され、現地調査の今年度の目的が達成された。この中央アジアの調査では、国内でおこなったその他の調査(縄文土器の文様、装飾古墳の装飾構成にみられる、ユーロ=アジアの初期農耕社会、およびわが国に影響をあたえたユーロ=アジアの騎馬民族美術の痕跡がみとめられる部分の文様との関連性を考えるうえで、その文様比較の資料の充実した収集をおこなえたことになる。これら以上すべての現地調査では工芸や建造物の資料をデジタルカメラと一眼レフで撮影した。非デジタルの画像も目下デジタル処理作成をおこなっている。またすでにデジタル化されている図像から、中央アジアの文様、イスラームから仏教美術までを貫く植物文様の形態分析を進行中である。

地図２

ユーロ=アジアの　極西　と　極東

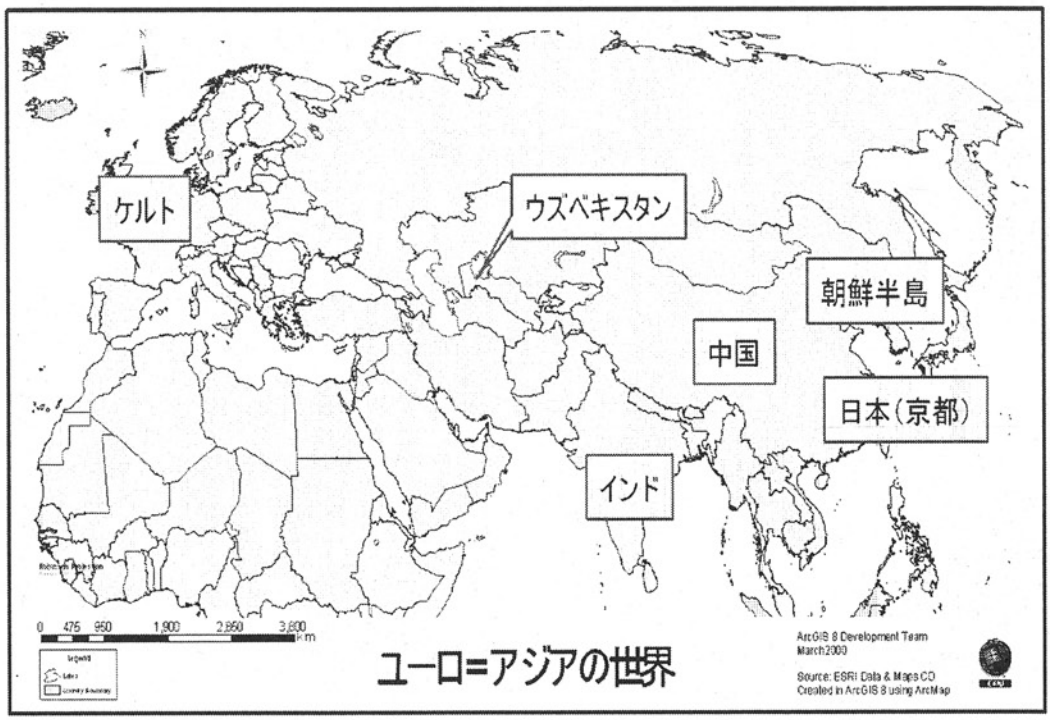
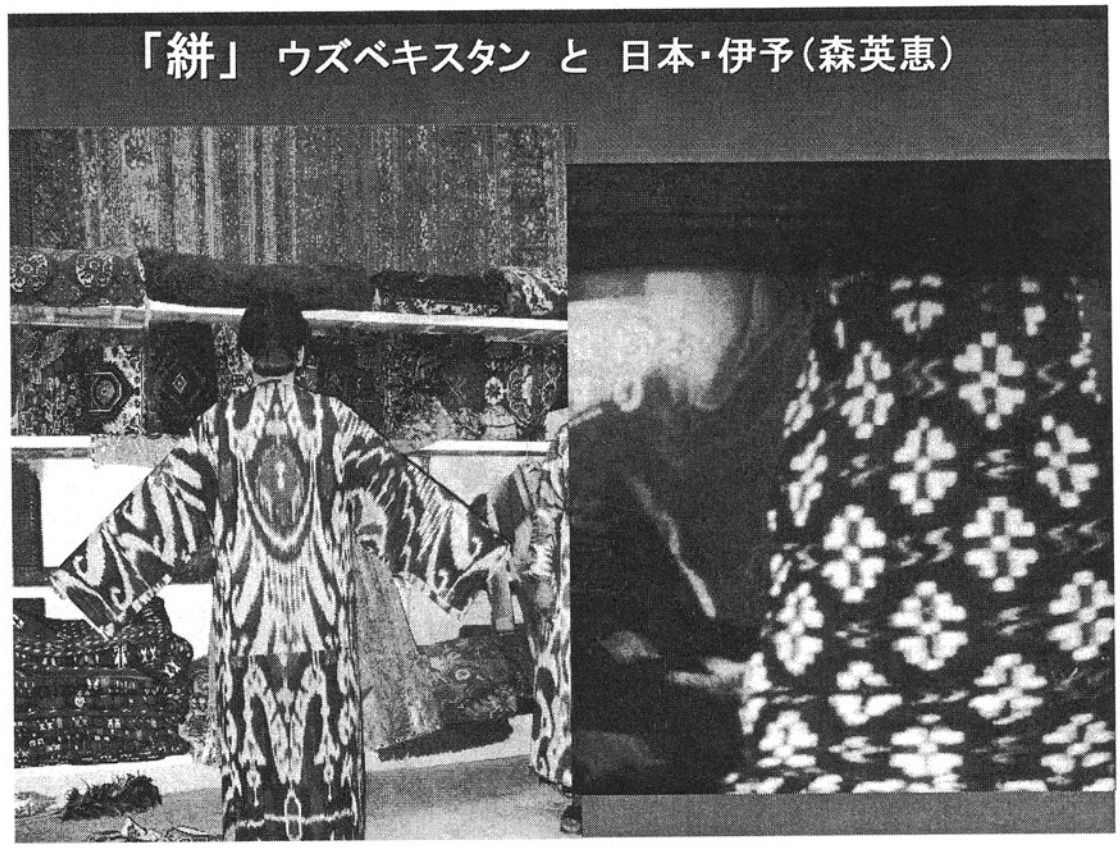



図3